

# 波多利朗の Funky Goods

## 謎パー機はなかったけれど…… 香港電腦中心事情〈その2〉

### キーボード入力もできる変な格好の ペン入力パソコン「DTR-1」

#### 注1) PTV-30

いわゆる謎パーという名称で呼ばれているパームトップパソコン。中国製であり、本誌上ではたびたび登場しているの、結構有名になってしまった。

CPUにV30HL 7MHzを使用し、640×200のCGA画面と82キーのキーボードおよび2個のPCMCIA Type 2カードスロットを有する。電源は単三乾電池2個で、重量は電池込みで600gとなっている。

筆者は、アメリカのPDA専門のショップ、Edu CALCより個人輸入で入手した。日本語化はFEPを含めて容易な部類に属する。

製造元は、香港にあるGROUP SENSE LIMITED社である。

#### 注2) PTP-20

PTV-30と同じ会社が製造するパームトップパソコン。PTV-30の弟に相当する。CPUにV20 14MHzを使用し、640×200のCGA液晶と80キーのキーボードを持つ。

PTV-30と外観上異なるところは、HP-200LXのようにテンキーを持ち、キーがボタンタイプになっているところである。

筆者はこのマシンを所有してはいないが、おそらくタッチタイピングは困難なのではなかろうか。

PTV-30と比較して軽量化が図られており、本体重量はバッテリー込みで350gということだ。

#### 注3) DAUPHIN DTR-1

アメリカ・イリノイ州にあるDauphin Technology, Inc.が発売しているマシン。

参考までに、下記に所在地を示しておく。

Dauphin Technology, Inc.  
377E.Butterfield Rd.,  
Suite900  
Lombard, Illinois 60148  
TEL: 708-971-3400  
FAX: 708-971-8443

2回連続でお送りしている「香港電腦中心事情」であるが、今回は香港の深水埗で購入してきたペン入力パソコン、DAUPHIN DTR-1を紹介しよう。

パームトップパソコンコレクターの筆者は、この5月連休の香港訪問でも、新機種の謎パー機がないかどうかウオッチしてきた。しかし、探し方が悪かったのか、あるいはそもそも市場に出ていないのか、パームトップパソコンの類はほとんど見受けられなかった。わずかに深水埗高登電腦中心内のショップにPTV-30(写真1)(注1)が置いてあったにすぎない。PTV-30と同じ会社が発売しているPTP-20(注2)があることを期待して行ったのだが、ついに見かけることはなかった。

しかし、同じく深水埗高登電腦中心内のショップで、パームトップではないが、ちょっと変な形をしたサブノート(と言っていいのやら?)を見つけたので購入してきた。それが今回ご紹介するDAUPHIN DTR-1(注3)である。

#### 店のおばちゃん和価格交渉

DAUPHIN DTR-1は、深水埗の高登電腦中心内のパソコンショップ「永仕國際公司(WINGS INTERNATIONAL COMPANY)」(注4)で購入した。高登電腦中心を何気なく歩いていると、店のおばちゃんが集まってきた客(香港版廃人ですな)に対して熱心に製品説明をしている。なにかと思って覗いてみると、変な格好をしたマシンと次のような宣伝文句が目に入った。

- ・体積小小 並有内置FAX/MODEM
- ・DAUPHIN486袋式寫中文電腦
- ・HK \$ 7500Only!

DAUPHIN DTR-1と呼ばれているこのマシンは、ペン入力パソコンであるが、本体にキーボードを接続することによって、通常のキー入力操作も行えるようになっている。このマシンはバリバリの新製品ではない。あとで雑誌のバックナンバーをひっくり返してみたら、Mobile Office(注5)1994JULY号の96ページに、新製



▲DAUPHIN DTR-1



写真1 PTV-30

品紹介記事として掲載されていたので、10ヵ月ほど前に出た製品だと思われる。どうも在庫処分として、安売りをしていただろうだ。

CPUはCyrixの80486SLC-25MHz、HDDにはHP社製のキティホークを搭載しており、ディスプレイもバックライト付きモノクロVGAなので、日本語化は簡単そうである。それ以上に、デザインがなんと言っているのか、飛拍子もないものだったので気に入ってしまった。

購入意志が固まったところで、次は店のおばちゃんと価格の相談である。一般的に香港のショップでは、日本人と見られると、まず価格をまけてくれることはない。しかし、筆者は回りに集まってきた香港廃人連中を巻き込んで、値切り交渉を開始した。

本機の店頭価格は、RAM 4MBのモデルで、7500香港ドルだったが、RAMを6MBに拡張し、カードでの支払いによる手数料を入れて7600香港ドルで購入した。これが本当に安いのかどうかは判断しかねるが、まあ、まけ



でもらったということ、および値切り交渉が結構面白かったことで満足することにした。

ちなみに、この店のおばちゃん、商品知識がものすごく豊富で、売り込みもうまく、驚いてしまった。購入したときも、すべての機能を実際に使用して説明してくれるなど、サービスもよい。日本のショップには、店員の製品知識が少なく、なにを聞いてもわからないといった店もあるが、ぜひこの深水埗のおばちゃんを見習ってほしいものである。

## DAUPHIN DTR-1の商品構成

以下に、DAUPHIN DTR-1の製品仕様を示す。

- ・CPU：Cyrix80486SLC-25MHz
- ・Video：6インチモノクロLCD(外部出力は800×600、256Colorまで対応)
- ・HDD：40MBのHP社製キティホーク内蔵(Double Space導入済みで80MB化)
- ・FDD：1.44MBの外付けFDD付属
- ・I/O：1シリアル、1パラレル、1外部CRT出力
- ・Modem：96/24FAX MODEM内蔵
- ・KB：82キーのキーボード付属
- ・バッテリー：7.2Vニッケル水素バッテリー内蔵
- ・その他：ACアダプタ、レザーケース、入力用ペン付属。英語版Windows、Word、Excelプリインストール済み

DTR-1は、3つのカートンに分けて格納されている。このカートンは、3つ並べるとDTR-1の外形写真が現れるようになっており、なかなかオシャレだ(写真2)。それぞれの箱の中身は、以下のとおりである。

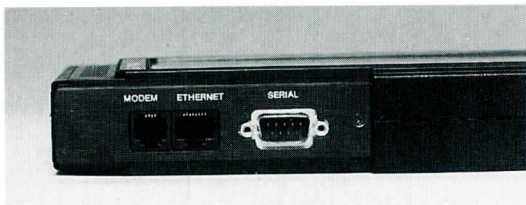


写真3 DTR-1本体上面にある各種コネクタ

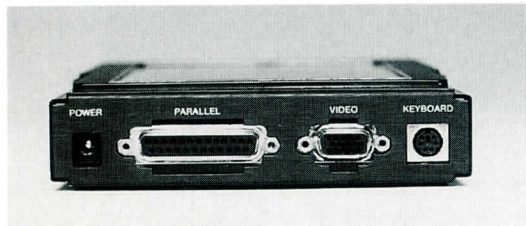


写真4 DTR-1本体右側面



写真2 DTR-1の入っていた外箱

### (1)第一の箱

DTR-1本体、本体ハードカバー、ACアダプタ

### (2)第二の箱

84キーのミニキーボード、本皮レザーケース、入力用ペン

### (3)第三の箱

Windows3.1マニュアルおよびソフトウェア

Windows for Penコンフィギュレーションソフトウェア

DOS6.0マニュアルおよびソフトウェア

DAUPHINユーティリティソフトウェア

取扱説明書

## 武骨そのものの外観

このマシン、非常に変な格好をしている。お世辞にもスマートとは言えず、無骨そのものだ。本体はペン入力機能を内蔵しているため、単体で持ち運んで使用することができる。

本体上面には、電話回線に接続するためのモジュージャックと、イーサネット用のコネクタ、シリアルポート2個が装備されている(写真3)。因みに、モデムは内蔵されているが、ネットワークインターフェイスはオプションとなるので、イーサネット用のコネクタはダミーとなっている。

本体右側面には、付属のキーボード接続用のコネクタ(PS2タイプ)とパラレルポートおよび外部CRT出力用コネクタがあり(写真4)、本体下側には、電源スイッチ

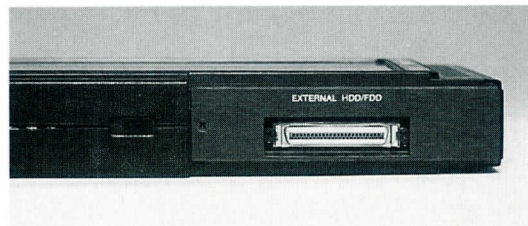


写真5 DTR-1本体下部にあるFDD接続用コネクタと電源スイッチ(左)

波多利朗の  
Funky Goods

注4)「永仕国際公司」  
(WINGS INTERNATIONAL COMPANY)

下記に所在地を示す。  
「永仕国際公司」(WINGS INTERNATIONAL COMPANY)  
WINGS TECHNOLOGY CO., LTD.  
Shop69, 1/F., Golden Shopping Center,  
146-152Fuk Wah St.,  
Shamshuipo,  
Kln, Hong Kong  
TEL/FAX: 720-8738

注5) Mobile Office

アメリカの有名な携帯端末専門雑誌。Cowles Business Media社が発行している。

日本では、秋葉原のLaozザ・コンピューター館1階の洋書コーナー、あるいはT・ZONEミナミ1階で購入することが可能だ。

しかし、人気のある雑誌なので、入荷するとすぐに売り切れてしまい、なかなか手に入れるのがむずかしい。

同様の携帯端末専門誌では、このほかにもL. F. P., Inc. 社が発行するPC Lap Top MAGAZINEなどが有名である。

写真6 DTR-1に付属してくる82キーのキーボード。クリック感はいまひとつ



と外付けFDD用コネクタが配置されている(写真5)。

本皮製のケースは、スタンドの役目も果たしており、キーボードを接続してデスクトップ機のように使用するには、DTR-1本体を立てかけることができるようになっている。

さて、付属のキーボード(写真6)と外付けFDDを接続してみると、なかなかサイバーな雰囲気になる。特にオマケなところは、FDD接続コネクタの位置であろう。本体下側にかなりの大きさのコネクタを接続するので、本体が持ち上がってしまい、どうにも収まりが悪い。まあ、細かいことは言わないというのが、この手の製品とつき合う最善の方法なので、別に構わないが……。

入力用のペンは、時計用のボタン電池3個で動作する。ペン中央部には、クリック用のスイッチが2個付いている。付属のACアダプタは、115V、220V、230V対応のもので、問題なく使用できるが、長時間使用していると熱くなるのが気になった。

## 内蔵アプリのバックアップ

電源を入れてみると、ソフトウェアはプリインストールされているので、すぐWindowsを使うことができる。Windows上には、DAUPHIN社のさまざまなアプリケーションソフトと、「中文之星」Ver2.0も入っていたので、念のためバックアップを取ることにした。

しかし、FDで取っていたのでは大変である。できればMOを使用して一発で終わらせたいところだ。そこで今回は、SCSI I/Fを介してMOドライブを接続してみることにした(写真7)。

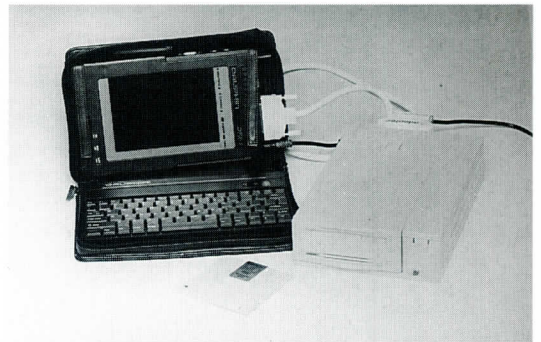


写真7 DTR-1にAdaptec Mini SCSIを介して、東芝製MOドライブOD-D300Bを接続する

SCSI I/Fであるが、PCMCIA対応のものとパラレルポートを使用したものがあるが、DTR-1にはPCMCIAのスロットが装備されていないので、パラレルポート接続のSCSIを使用した。

今回用いたのは、Adaptec社製のMini SCSIである。この製品は、ツクモDOS/V館にて1万9800円で購入した。接続は簡単で、DTR-1のパラレルポートにつなぐだけでよい。あとはドライバソフト(英語版)を導入すれば、自動的にCONFIG.SYSとAUTOEXEC.BATを書き換えてくれる。

注意することは1点のみで、このMini SCSIアダプタは、ドライブ側でTerm Powerを供給していないSCSI周辺機器は認識できないということである。

今回は東芝製128MB MOドライブ、OD-D300B(注6)を使用してみたが、このドライブはTerm Powerをドライブ側から供給していないので、単体で接続しても認識できない。したがって、今回はMOドライブの先にTerm Powerをドライブ側から供給できる同じ東芝製CD-ROMドライブ、XM-4100Aを接続して、認識させた。なお、MOドライブとしては、橘屋鶴藏氏の有名なドライブ、SCSIDISK.SYSを使用した。

CONFIG.SYSおよびAUTOEXEC.BAT中に組み込まれたドライバを、図1に示す。

以上の処理でDTR-1にMOドライブを接続でき、MOにHDDのバックアップを取ることができる。

## DTR-1の基本性能

DTR-1の電源を投入すると、図2のメッセージが出される。

BIOSはフェニックス社製のPen BIOSで、ビデオチップにはOAK社のものを使用している。起動時にF2キーを押すか、もしくは付属のペンでLCD上に表示された四角い領域をタッチすることで、BIOSのセットアップ画面に入ることができる。

注6)東芝製128MB MOドライブ、OD-D300B  
128MB MO全盛時代には、非常に高速なMOドライブであった。動作音も静かに入っている。

余談であるが、最近あまりMOを使用しなくなってきた。というのも、低価格なCD-Rが出てきたので、大容量のデータを保存する場合は、CD-Rに焼いてしまうからである。

```

• CONFIG.SYS
Device=C:YTSCSIYMA348.SYS
Device=C:YTSCSIYTSCSI.SYS
Device=C:YTSCSIYTSLCDR.SYS /d:TSLCD
.....
device=c:YtscsiYscsidisk.sys

• AUTOEXEC.BAT
C:YTSCSIYMSCDEX /d:TSLCD /m:10
    
```

← AdaptecのMini SCSIが組み込まれたドライバソフト類

← 橘屋鶴藏氏のMOドライバ

図1 CONFIG.SYSおよびAUTOEXEC.BATに組み込まれたドライバ



このマシンには、40MBの容量を持つキティホーク HDDが内蔵されているが、そのパラメータは図3のとおりである。

ペン入力ドライバは、AUTOEXEC.BAT中に下記のように登録されている。

```
LH /L:1,26144C:¥DAUPHIN¥KVTMOUSE.  
COM /2
```

このドライバが常駐すると、以下のようなメッセージが出力され、ペン入力デバイスがCOM2を介して使用できるようになる。

```
Kurata Video Tablet driver Version 8.20a  
LCD alignment method is centered  
Installed on COM 2
```

LCDパネルの輝度およびコントラスト調整は、LCDパネル横のBRIGHTNESS, CONTRASTと書かれた部分をペンで押すことによって行う。この部分には、このほかにもSUSPENDとTURBO制御が行えるようになっている。SUSPENDの部分を押すと、LCD表示が消え、レジューム状態に入る。この状態からの復帰は、LCDパネルの任意の位置を、ペンで押せばよい。またTURBO制御はDTR-1のCPUクロックを2段階に変えるためのものである。

ここで、DOS上の基本的なベンチマークテストを行った。結果を表1に示す。

## DTR-1の英語版Windows

画面1は、DTR-1にインストールされている英語版Windows(注7)の起動画面である。いろいろなアプリケーションソフトが入っていた。

画面2は、DTR-1のWindows上で、ペン入力対応のメモ帳を起動したところである。スペルチェック機能が内蔵されており、付属のペンでアルファベットを書き込むと、変換して入力される。認識率はよいほうだと思うが、変換に若干時間がかかる。また、ペン入力のほかにも、画面上のソフトウェアキーボードを使用して入力することが可能だ。

画面3は、コントロールパネル内にあるRotateアイコン(注8)をクリックしたところである。このユーティリティを使用することによって、表示画面を90度ずつ回転させることができ、DTR-1を縦置きにして使用することも可能になる(写真8)。

画面4は、ファイルマネージャを起動したところである。パラレルポートに接続するタイプのSCSI I/Fを介してCD-ROMドライブを接続しており、これがEドラ

イブとしてマウントされている。

画面5は、インストールされていた「中文之星」の起動時の画面である(注9)。中文之星では、画面6のような入力方法を選択することができる。画面7は、ここで日本語のひらがな入力のモードに設定した場合の画面で

	Size	Cyl	Hd	Pre	L-Z	Sec
Hard Disk 1 : AUTO DETECT 1	40MB	820	6	0	820	17

図2 電源を投入すると表示されるメッセージ

```
COPYRIGHT 1991, OAK TECHNOLOGY INC., LCD VGA BIOS UCv1.00 03/17/93  
VIDEO MEM:1MB CHIP:043
```

```
Phoenix Pen BIOS/D(TM) Vresion 1.00  
Copyright (c) 1985-1992 Phoenix Technologies Ltd.
```

```
DAUPHIN DTR-1  
Reference ID 36
```

図3 キティホークのパラメータ

表1 DAUPHIN DTR-1ベンチマークテスト

(1)pfm486 Ver1.77の結果

\*TURBO ONの場合

Performance of 486-PC Ver1.71(C)1992 HCG02016

Cx486	Frequency	=	25.04MHz	v1.71
Ecache	Read Time	=	255ns/dword	(4.4wait)
Ecache	Write Time	=	127ns/word	(1.2wait)
Memory	Read Time	=	256ns/dword	(4.4wait)
Memory	Write Time	=	127ns/word	(1.2wait)

\*TURBO OFFの場合

Performance of 486-PC Ver1.71(C)1992 HCG02016

Cx486	Frequency	=	8.00MHz	v1.71
Ecache	Read Time	=	826ns/dword	(4.6wait)
Ecache	Write Time	=	456ns/word	(1.6wait)
Memory	Read Time	=	830ns/dword	(4.6wait)
Memory	Write Time	=	455ns/word	(1.6wait)

(2)3DBENCH Ver1.0Cの結果

```
11.4 (Turbo ON)  
1.7 (Turbo OFF)
```

(3)Landmark Speed Test Version 2.00の結果

	Turbo ON	Turbo OFF
CPU	78.14MHz	5.58MHz
FPU	2.75MHz	0.53MHz
Video	4636.00chr/ms	2520.00chr/ms

(4)CPUBENCH Ver0.980の結果

	Turbo ON	Turbo OFF
Ratio to the first PC9801	20.14	3.52
Execute Time	3.43sec	19.60sec

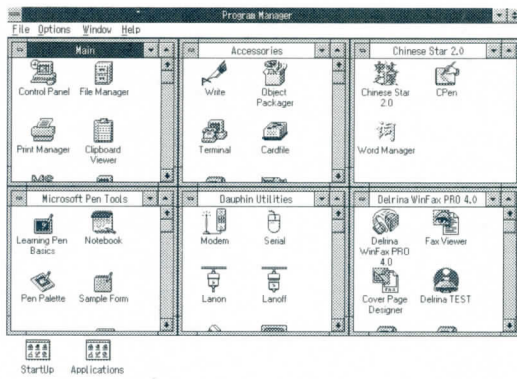
注7)DTR-1の英語版Windows

CPUが非力であることと、搭載メモリが少ないことから、DTR-1でWindowsを使用すると、かなり遅い。おまけにHDDはDouble Spaceによる倍増化が図られているので、ディスクアクセスに時間がかかり、よけい遅く感じられる。

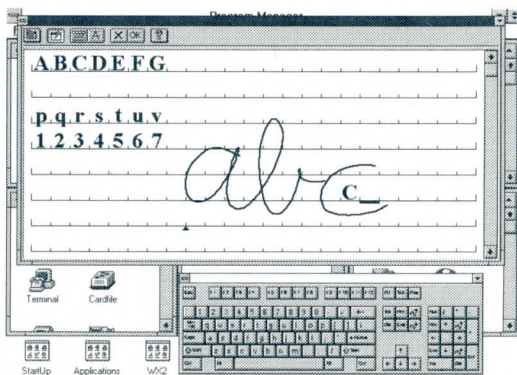
注8)Rotateアイコン

液晶表示の回転機能は、非常に便利だ。特にDTR-1を片手で持ちながら操作することを考えると、液晶表示を90度回転させて、アップルのニュートンのようにペンで入力できるので、かなり使いやすさ。

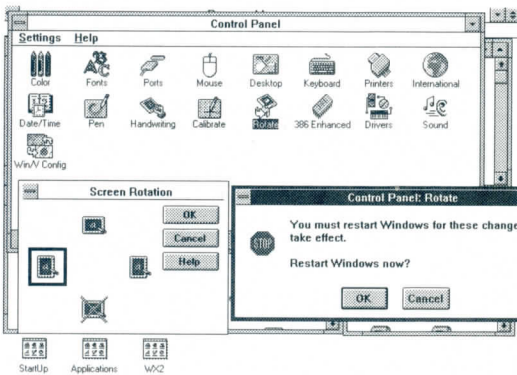




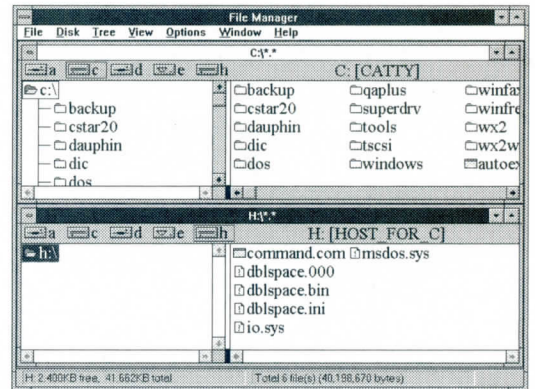
画面1 DTR-1にプリインストールされていたWindowsの起動画面。中文之星のほかにもいろいろなユーティリティソフトが入っていた



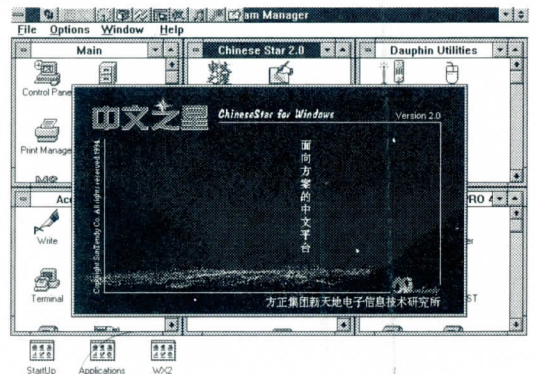
画面2 英語環境下のWindows上で、ペン入力のメモ帳を起動したところ。付属のペンでアルファベットを書き込むと、変換して入力される。画面下方に見えるのは、ソフトウェアキーボードで、これを押し入力することも可能だ



画面3 画面ローテーションユーティリティを起動したところ。コントロールパネル内にあるRotateアイコンをクリックすることによって、画面の向きを変更することができる



画面4 DTR-1でのファイルマネージャ画面。Double Spaceが導入されているため、Hドライブが生成されている。なお、パラレルポートに接続するタイプのSCSI I/Fを介してCD-ROMドライブがEドライブとしてマウントされている



画面5 DTR-1にプリインストールされていた中文ソフト「中文之星」Ver.2.0を起動したところ



写真8 DTR-1を縦置きにして、Windowsを起動させたところ。横に置いてあるのは、大きさを比較するための中国製タボコ「Jin Jian」

さまざまなフォントの日本語を入力しているところである。フォントサイズの設定も自由に行える。

注9)「中文之星」の起動画面

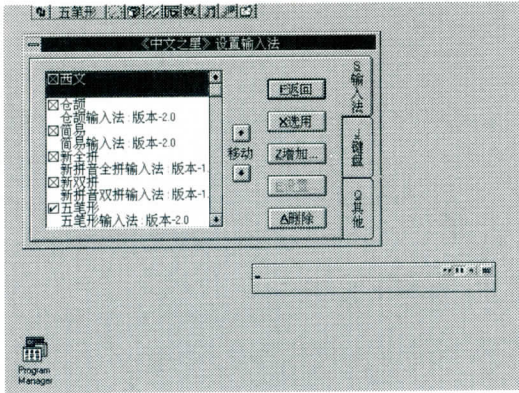
「中文之星」の起動画面は、なかなかドラマチックだ。小高い丘のようなところから町の夜景を見渡していると、突然稲妻が光り、おもむろに縦書きの漢字が表示されるといったものである。かなりよくできたソフトだと思われるので、ぜひ日本語もサポートしてもらいたいものだ。

ある。Windowsの日本語化を行わなくても、「中文之星」のものを使用してひらがなを入力することが可能だ。

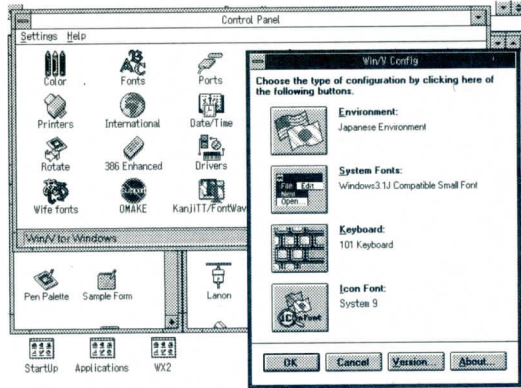
中文之星では、日本語入力用のソフトウェアキーボードが用意されている。ただし、ここで入力した文章は、当然であるが「中文之星」が入っていない日本語Windows上ではファイルの内容を読むことはできない。

画面8は、「中文之星」の日本語かな入力モードで、さ

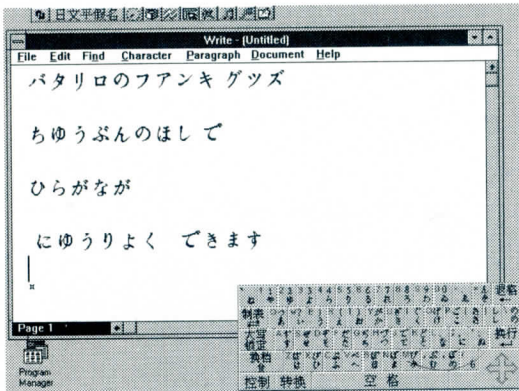




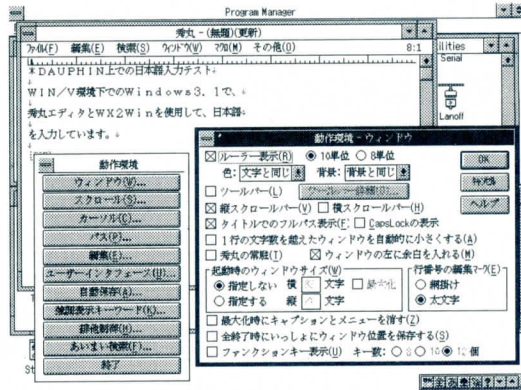
画面6 「中文之星」での入力方法(輸入法)一覧



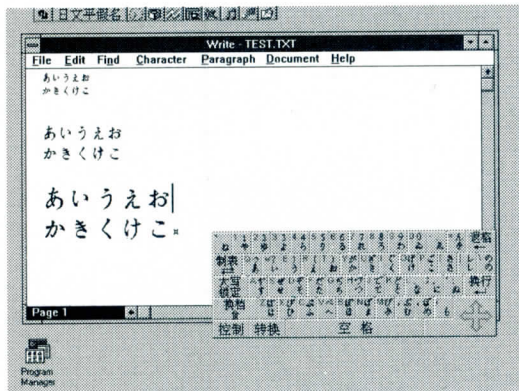
画面9 DTR-1にWin/Vを導入した



画面7 「中文之星」で、日本語のひらがな入力モードに設定したときの画面。「中文之星」のソフトキーボードから、ひらがなを入力することができる



画面10 DTR-1のWin/V環境下で、秀丸エディタとWX2 Winを使用して日本語を入力しているところ



画面8 「中文之星」の日本語かな入力モードで、さまざまなフォントサイズの文字を入力しているところ

## DTR-1の日本語化

### (1) Win/V導入によるWindowsの日本語化

DTR-1には英語版Windowsがインストールされているので、これにWin/V(注10)を導入して日本語化を行った(画面9)。これは、日本語化を行う最も簡単な方法である。

Win/Vの導入そのものはまったく問題なく行えたが、

Win/V ConfigのEnvironmentの項目で日本語環境を選択すると、DTR-1のペン入力によるスペルチェック機能(手書きのアルファベットを自動認識し、変換して入力する機能)が使用できなくなってしまう。DTR-1の特徴的な機能だけに、日本語環境化でこの機能が使用できなくなってしまうのは、少し残念である。なお、同じくWin/V Configで英語環境に設定すれば、スペルチェック機能は元通り使用できるようになる。

画面10は、Win/Vの日本語環境下で、秀丸エディタとWX2 Winを使用して、日本語を入力しているところである。

### (2) DOS/VスーパードライバーズによるDOSの日本語化

Windows上の日本語化ができたので、次にDOSの日本語化を行ってみる。

DTR-1には、英語版のMS-DOS Ver6.2が導入されているので、これにDOS/VスーパードライバーズとWX2+を導入してDOSの日本語化を行ってみた。以下に手順を示す(注11)。

①DOS/Vスーパードライバーズをインストールする  
専用のインストーラを使用して、英語表示のまま導入を行う。

#### 注10) Win/V

今回は、ソフトバンク社が発行するムック「Inside Win/V」を使用した。

#### 注11) 以下に手順を示す

ここに示した手順は、あくまでも筆者の環境での一例であることをお断りしておく。

②インストールが終了すると、config.sysに以下の行が書き加わる

```
DEVICE=C:¥SUPERDRV¥FONTEX.EXE
DEVICE=C:¥SUPERDRV¥VESAPAT.EXE/JP
DEVICE=C:¥SUPERDRV¥DISPEX.EXE/D=
VGA.DRV/JP
```

以上で、日本語表示のみの処理は終了する。

③WX 2+を導入する

今回は、WX 2+Ver2.7DOS/Vを使用した。まず、WX 2+専用のインストーラを使用して導入を行う。インストールが終了すると、config.sysに以下の行が書き加わる。

```
DEVICE=C:¥WX2¥WXK.SYS/A1
DEVICE=C:¥WX2¥WX2A8.SYS/INI=C:¥
WX2¥WX2SYS.INI/A1
```

④このままでは、WX 2+は組み込まれないので、IBM PC DOS J6.1/Vのkkcfunc.sysをDTR-1のDOSディレクトリにコピーして、config.sys中のWX 2+設定行の前に以下の行を書き加える

```
device=c:¥dos¥kkcfunc.sys
```

⑤使用するDOSのバージョンによっては、kkcfunc.sysが正常に組み込まれないこともあるので、その場合には、setverコマンドを使用してバージョンの整合を図る。

【例】setver c:¥dos kkcfunc.sys 5.00

表 2

DTR-1のconfig.sys  
ファイルとautoexec.  
batファイルの例

\*autoexec.batファイルの内容

```
goto %config%
:Original
@C:¥DOSYSHARE.EXE /1:500 /f:5100
LH /L:0:1,42384 /S C:¥DOSYSMARTDRV.EXE
@ECHO OFF
PROMPT $p$g
SET DIRCMD=/OGN
PATH C:¥WINDOWS;C:¥DOS;C:¥DAUPHIN;C:¥TSCSI;C:¥TOOLS¥VZ;C:¥TOOLS¥YFD;
SET TEMP=C:¥DOS
LH /L:1,26144 C:¥DAUPHIN¥KVTMOUSE.COM /2
CALL DAUPHIN
chkdsk /f
goto end

:Parallel
C:¥TSCSI¥MSCDEX /d:TSLCD /m:10
@C:¥DOSYSHARE.EXE /1:500 /f:5100
LH /L:0:1,42384 /S C:¥DOSYSMARTDRV.EXE
@ECHO OFF
PROMPT $p$g
SET DIRCMD=/OGN
PATH C:¥WINDOWS;C:¥DOS;C:¥DAUPHIN;C:¥TSCSI;C:¥TOOLS¥VZ;C:¥TOOLS¥YFD;
SET PATH=%PATH%;C:¥SUPERDRV¥
SET TEMP=C:¥DOS
LH /L:1,26144 C:¥DAUPHIN¥KVTMOUSE.COM /2
CALL DAUPHIN
chkdsk /f
goto end

:Dosv
@C:¥DOSYSHARE.EXE /1:500 /f:5100
LH /L:0:1,42384 /S C:¥DOSYSMARTDRV.EXE
@ECHO OFF
PROMPT $p$g
SET DIRCMD=/OGN
PATH C:¥WINDOWS;C:¥DOS;C:¥DAUPHIN;C:¥TSCSI;C:¥TOOLS¥VZ;C:¥TOOLS¥YFD;
SET TEMP=C:¥DOS
LH /L:1,26144 C:¥DAUPHIN¥KVTMOUSE.COM /2
CALL DAUPHIN
chkdsk /f
goto end

:JPFEP
@C:¥DOSYSHARE.EXE /1:500 /f:5100
LH /L:0:1,42384 /S C:¥DOSYSMARTDRV.EXE
@ECHO OFF
PROMPT $p$g
SET DIRCMD=/OGN
PATH C:¥WINDOWS;C:¥DOS;C:¥DAUPHIN;C:¥TSCSI;C:¥TOOLS¥VZ;C:¥TOOLS¥YFD;
SET TEMP=C:¥DOS
LH /L:1,26144 C:¥DAUPHIN¥KVTMOUSE.COM /2
CALL DAUPHIN
chkdsk /f
goto end

:end
```

\*config.sysファイルの内容

```
[menu]
menuitem=Original, English Mode
menuitem=Parallel, SCSI Driver Mode
menuitem=Dosv, Dos/v Mode (No FEP)
menuitem=JPFEP, Dos/v FEP Mode (With WX2+)
```

```
[common]
lastdrive=0
```

```
[Original]
rem device=c:¥dos¥interlnk.exe
DEVICE=C:¥DOS¥HIMEM.SYS
DEVICE=C:¥DOS¥EMM386.EXE RAM HIGHSCAN
BUFFERS=20,0
FILES=40
DOS=UMB
FCBS=16,8
DEVICEHIGH /L:1,12048 =C:¥DOS¥SETVER.EXE
DOS=HIGH
STACKS=9,256
DEVICE=C:¥DOS¥DBLSPACE.SYS /MOVE
INSTALL=C:¥DOSYSHARE.EXE /1:500 /f:5100
```

```
[Parallel]
Device=C:¥TSCSI¥MA348.SYS
Device=C:¥TSCSI¥TSCSI.SYS
Device=C:¥TSCSI¥TSLCDR.SYS /d:TSLCD
```

```
rem device=c:¥dos¥interlnk.exe
DEVICE=C:¥DOS¥HIMEM.SYS
DEVICE=C:¥DOS¥EMM386.EXE RAM HIGHSCAN
BUFFERS=20,0
FILES=40
DOS=UMB
FCBS=16,8
DEVICEHIGH /L:1,12048 =C:¥DOS¥SETVER.EXE
DOS=HIGH
STACKS=9,256
DEVICE=C:¥DOS¥DBLSPACE.SYS /MOVE
device=c:¥tscsi¥scsidisk.sys
INSTALL=C:¥DOSYSHARE.EXE /1:500 /f:5100
```



以上で、DOSの日本語化とWX2+の導入が完了する。参考までに、筆者のDTR-1のconfig.sysとautoexec.batの内容を表2に示しておく。

### (3)DOS上のアプリケーションの動作

DOS/V化したDTR-1上で、日本語アプリケーションを動かしてみた。

写真9は、ファイル管理ソフトFDの画面、また写真10はVzエディタの画面である。また、写真11は通信ソフト「まいとーくorange Ver2.0」の起動画面である。

DTR-1にはファックスモデムが内蔵されているが、どういうわけか内蔵モデムを認識できるのは、英語版Windows上のTerminalだけであり、その他の日本語対応の通信ソフトでは認識できなかった。したがって、今回はDTR-1上部にあるCOM2ポートに、OMROM社製のポケットモデムを接続するという方法で通信を行った(写真12)。

さて、以上紹介してきたペン入力パソコンDTR-1であるが、英語環境で使用する場合には、ペン1本で手書き入力ができ、非常に便利である。ただし日本語環境では、ペン入力ドライバーが用意されていないので、必ずキーボードを接続しないと使用できない。

また、CPUもCyrix社製80486SLC-25MHzではかなり非力であり、Windowsは処理が重すぎる。もう少し高性能のCPUが欲しいところである。

日本ではお目にかかることがないマシンではあるが、いろいろといじって遊ぶにはもってこいのFunky Goodsといえるだろう。

波多利朗の  
Funky Goods

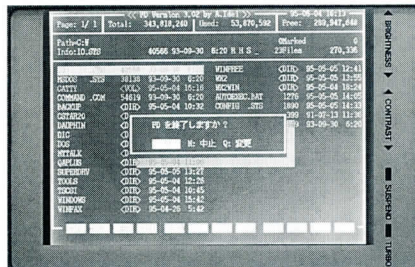


写真9 日本語化したDTR-1のDOS上で、ファイル管理ソフトFDを起動しているところ

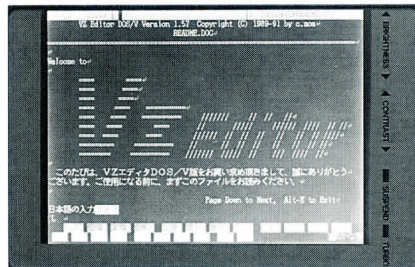


写真10 同じく日本語化したDTR-1のDOS上で、Vzエディタを起動しているところ

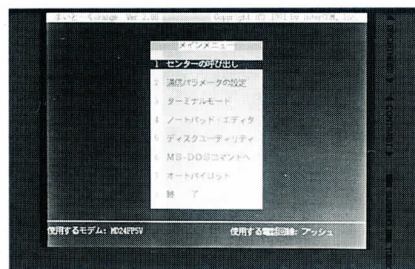


写真11 通信ソフト「まいとーくOrange」の起動画面

```
[Dosv]
rem device=c:\YdosYinterlnk.exe
DEVICE=C:\YDOSYHIMEM.SYS
DEVICE=C:\YDOSYEMM386.EXE RAM HIGHSCAN
BUFFERS=20,0
FILES=40
DOS=UMB
FCBS=16,8
DEVICEHIGH /L:1,12048 =C:\YDOSYSETVER.EXE
DOS=HIGH
STACKS=9,256
DEVICE=C:\YDOSYDBLSPACE.SYS /MOVE
INSTALL=C:\YDOSYSHARE.EXE /I:500 /f:5100

DEVICE=C:\YSUPERDRVYFONTEX.EXE
DEVICE=C:\YSUPERDRVYVESAPAT.EXE /JP
DEVICE=C:\YSUPERDRVYDISPEX.EXE /D=VGA.DRV /JP

[JPPEP]
rem device=c:\YdosYinterlnk.exe
DEVICE=C:\YDOSYHIMEM.SYS
DEVICE=C:\YDOSYEMM386.EXE RAM HIGHSCAN
BUFFERS=20,0
FILES=40
DOS=UMB
FCBS=16,8
DEVICEHIGH /L:1,12048 =C:\YDOSYSETVER.EXE
DOS=HIGH
STACKS=9,256
DEVICE=C:\YDOSYDBLSPACE.SYS /MOVE
INSTALL=C:\YDOSYSHARE.EXE /I:500 /f:5100

DEVICE=C:\YSUPERDRVYFONTEX.EXE
DEVICE=C:\YSUPERDRVYVESAPAT.EXE /JP
DEVICE=C:\YSUPERDRVYDISPEX.EXE /D=VGA.DRV /JP

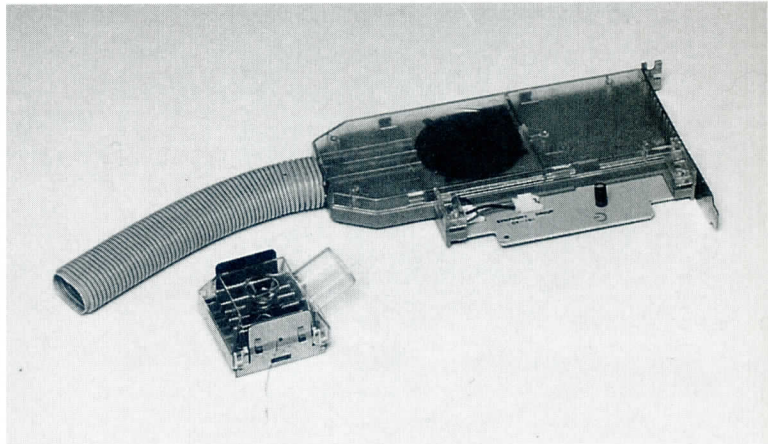
rem COUNTRY=081,932,C:\YDOSYCOUNTRY.SYS
rem DEVICE=c:\YdosYSias.sys
device=c:\YdosYkkfunc.sys

DEVICE=C:\YWX2YWXK.SYS /A1
DEVICE=C:\YWX2YWX2A8.SYS /INI=C:\YWX2YWX2SYS.INI /A1
```



写真12 DTR-1のシリアルポートにポケットモデムを接続する





写真A ISAバススロットに挿入する、ファン付きのカード

## ダクト付きファンカード

今回の香港編とは関係がないのだが、例によって変なモノ紹介コーナーである。

外出先から直帰するときに秋葉原に立ち寄るといのは、廃人不良サラリーマンの見本であるが、今回ご紹介するグッズも、おなじみのコースで入手したものである。乱立気味の昨今のDOS/V雑誌では、ネタを探すのも容易ではなくなってきており、こういった変態グッズは、すぐにでも各誌上で取り上げられると思われるので、早めにご紹介しておこう。

入手場所は、秋葉原ラジオデパート地下1階にあるT・ZONEラジオデパート店。価格は4980円だった。見てのとおり、ISAバススロットに挿入する、ファン付きのカードである(写真A)。

一見、普通のファンカードのようであるが、他製品と異なるのは、カードからダクトが伸びており、その先にCPUのヒートシンクを付けるようになっていることだ(写真B、C)。

これはPentium100、120、130MHz用のCPUクーラーである。通常のCPUクーラーと異なる点は、ヒートシンクからの熱を、ダクトを通してケース外へ完全に排気する構造になっているところである。筆者はいろいろなCPUクーラーを見てきたが、ここまで徹底しているものはじめてだ(もっとも、超廃人のなかにはCPUを液冷しているお方も多いと

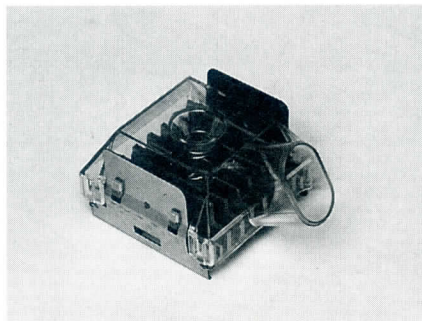
聞くが、とてもそこまではできない)。

メーカーはSYMPHONY GROUPという台湾の会社で、品番はCY-101、名称はCyclone CPU Coolerという。

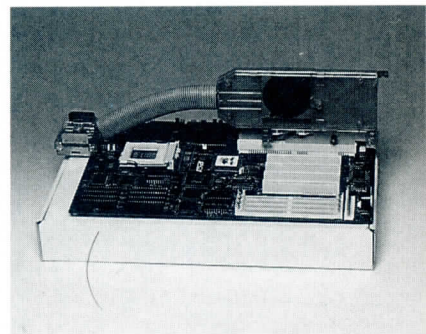
カードの半透明のカバー内部には、直径50mmのファンが取り付けられており、ここから熱気がケース外部へ排出される。CPU上に装着するヒートシンクは、両側からバネで挟み込むタイプである。

電源を入れると、キューーンというやや高めな音がしてファンが回転し、ヒートシンクからの熱気を排出する。

このCPUクーラー、本体もかなり怪しい製品だが、商品が入っていた箱も怪しさに気合いが入っている。どう理由なのか、箱の内側と外側が逆になっているのである。すなわち、箱の外観は無地のダンボールであり、



写真C 先端に付けるヒートシンク

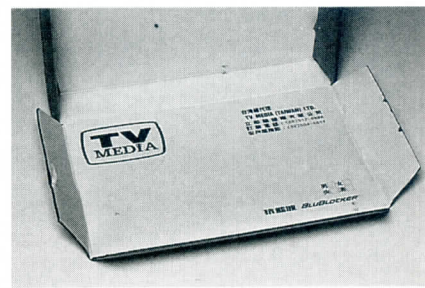


写真B カードからダクトが伸びており、その先にCPUのヒートシンクを付けるようになっている

内側になにやらいろいろと印刷されているのだ(写真D)。

どうしてこうなっているのかは知る由もない。おおかた箱の作成方法を間違えたか、もしくはまったく関係のない箱を裏返して流用したかのいずれかであろう。まあ、くだらないことであるが、筆者としては妙に気になる。ちなみに、箱の内側には、以下のような表示が印刷されていた。

TV MEDIA 台湾總代理  
TV MEDIA [TAIWAN] LTD.  
立即購國際有限公司  
抗藍波BLUEBLOCKER



写真D 箱の内側と外側が逆になっているパッケージ